

オープン カレッジ

1941年12月8日、日本陸軍が英領マレー半島に上陸する一方、海軍がハワイ真珠湾のアメリカ艦隊に奇襲攻撃を敢行し、太平洋戦争が始まった。今年は、太平洋戦争開戦から80年の年にあたる。そこで、国民に多大の犠牲をもたらしたこの戦争を、日本がなぜ行うことになったのかについて、あらためて考えてみよう。

あらためて太平洋戦争開戦を考える

に同南部に軍を進駐させる。これに対してアメリカは、日本への経済制裁を徐々に強化し、最後は石油輸出禁止の措置をとった。日本は局面を開戦するため、最終的に対米英開戦に踏み切ることになる。

しかしながら、日本は戦争を回避しようとしなかったわけではない。日本は1941年11月、石油禁輸解除を条件にインドシナ南部から軍を撤退するという、できる限りの妥協案をアメリカに提示する。これに対してアメリカは、インドシナに加え中国からの撤退をも要求する強硬な回答（いわゆる「ハル・ノート」）を行い、日米交渉は決裂した。つまり、最終局面で開戦を決定的にしたのは、アメリカ側なのである。しか

右の点に関して、1990年代以降、学界で主流になっているのが、グローバルな国際関係の展開にまで視野を広げる見方である。

1940年の日独伊三国同盟の締結により、アジア太平洋の動向は、ヨーロッパの戦局と密接に結びつくようになる。その結果、日本の政策は、日本自らの意図を超えて、グローバルな意味合いをもつこととなったのである。

アメリカにとって、日本の東南アジア進出は、ドイツ相手に孤軍奮闘するイギリスのアジア植民地に、深刻な脅威を及ぼすものだった。また日中戦争も、グローバルな戦争の一部として新たな位置づけをされる。さらに、1941年の独ソ戦争勃発後は、日本による対ソ攻撃が懸念されるようになる。こうして、アメリカとしては、グローバルな反日独伊連合のパートナーであるイギリス・中国・ソ連が苦境に立ち、日本による脅威にさらされる中で、日本を抑えるために強硬な政策をとらざるをえなかったのである。

日本は、それまで追求してきた自国主導のアジア新秩序を断念するか、戦争をするかの二者択一をアメリカに迫られ、新秩序の存立を賭けて戦うことを決断した。

グローバルな

国際関係への注目

を引き起こし、37年からは中国との全面戦争に突入する。さらに東南アジアへの進出にも乗り出し、40年に仏領インドシナ北部、41年



山形大学国際関係学
現代学
西田 敏宏 准教授

にしだ・としひろ 日本政治外交史、国際関係史。京都大学大学院法学研究科博士後期課程修了。博士（法学）。